
病みつきなのは

勲b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

病みつきなのは

【Nコード】

N8011T

【作者名】

勲b

【あらすじ】

なのはのヤンデレです。

かなりgdgdですが暇潰しにでもなればどうぞ。

なのはxオリ主です

続編として病みつきなのは「後日談」を投稿しました。
興味がある方は、見てくれたら嬉しいです!!

この話の I F E N D として病みつきなのは、選ばれなかった選択肢を投稿しました。

興味がある方は、見てくれたら嬉しいです!!

後書き書き直しました

「……どうしたんですか、なのはさん」

その日少年は管理局の仕事が終わり部屋へと戻ろうとした所を高町なのはは止めた

「少し用事があるんだけど……すぐ終わるから私の部屋まで来てくれないかな？」

「……またか」

高町なのはが仕事終わりの少年を呼び止めるのはコレが初めてではない

3ヶ月ほど前からこの質問はほぼ毎日続けられている

「すいません、今日はもう疲れてて……また今度じゃ駄目ですか？」

少年は苦笑いをしながら彼女の質問に答える

初めの方は呼ばれたら着いていったがやることといえばただの雑談であり

先ほどまで訓練をしていた少年としては今すぐにでも部屋へと戻りそのまま寝たいのだ。

「ごめんね、明日じゃなくて今日話したいことがあるの……とても大事な話だから」

何時もならああいえば諦めてくれるのに……もしかしたら、本当に大事な話なのかもしれない

「わかりました、行きましようなのはさん」

少年がそういうとなのは嬉しそうに笑いながら少年の手を握る

「じゃあ、早く行こ」

「ちよつと待ってください!!」

「?・・・忘れ物でもしたの?」「い・・・いや、そうじゃない、何で手を握るをですか!!?」

「・・・手を握っちゃ駄目なの?」

「いや・・・駄目って訳じゃ無いですけど・・・でも、その・・・恥ずかしいですし・・・」

「私は恥ずかしくないよ?」

どうやら何を言っても無駄らしい

首を傾げながらいうのはを見ながら少年は手を離してもらつのを諦める

そのまま場の流れにまかせて少年はなのはの部屋まで行く

「それで、大事な話って何ですか?」

なのはの部屋に着き少年は自分が呼ばれた理由を早速聞く

「せっかく部屋まで来たんだからそんなに急がないで、少しは休もうよ」

・・・本当に大事な話があるのか?

なのはは扉の前で立っている少年をソファーに座らせる

「紅茶がいい？それともコーヒーがいい？」

「・・・なのはさんと同じでいいです」

「なら、紅茶でいいね」

なのはは少年に飲み物の確認を取るとそのまま小型キッチンに行く
なのはさんやフェイトさんクラスにもなると部屋にキッチンまでつくのか・・・

あれ？そういえばフェイトさんがいない・・・

なのはさんとフェイトさんは同じ部屋のはずだしまだ仕事なのか・・・

「紅茶入れてきたよ」

ソファの前にある小さめ机の上にピンクと青のカップを置き
その青いカップを少年の前に置く

・・・ちょうどいい、聞いてみるか

「そういえばなのはさん、フェイトさんはどうしたんですか？」

「何で？」

「いや、少し気になって・・・」「何で私の前でフェイトちゃんのことを聞くの？」

「私が毎日のように部屋に誘っても余り来てくれないのに・・・
何でやつと来てくれたと思ったらフェイトちゃんの話しようとするのかな？」

「い・・・いえ、なのはさんとフェイトさんは同じ部屋だから帰って来ないのかと思ひまして・・・」

「そんなにフェイトちゃんに帰ってきて欲しいの？」

私と2人で居るのはそんなに嫌なの？」

「そ、そんなこと無いですよ・・・ただ、少しだけ気になった
けです、本当に少しだけ」

「・・・それだけ？」

「はい、それだけです」

「そう・・・フェイトちゃんは今日はヴィヴィオの部屋に入るよ、
私が今日は君と大事な話があるからってお願いしたの」

「・・・つまり、今日は始めから俺を部屋に呼んで大事な話をしよ
うとしてたのか」

少年は一端落ち着くため青のカップに手を伸ばし、紅茶を飲む
「・・・少し苦いな、まあ紅茶何て余り飲まないし、こんなものな
のか？」

「美味しい？」

少年がカップを置くと同時になのはが聞いてくる

「美味しいですよ、とても」

「えへへ、嬉しいな喜んでくれて、私も君に美味しいって言って貰
えるように頑張ったんだよ」

紅茶を入れるのに頑張る？・・・まあ、紅茶だって入れ方一つで味
が変わるとか聞くし・・・

なのはが照れ臭そうに自分の頬を掻く

少年はそんななのはを見てると1つの違和感に気付く

「あれ？なのはさん」

「どうしたの？」

「右手の人差し指どうしたんですか？」

先ほど少年の手を握った時は何も無かったのに今は右手の人差し指には包帯が巻かれている

「え！？・・・ちよつと訓練の時に怪我しちゃって・・・」

「でも、さつき手を握った時には何も無かったと思ったんですが・・・」

「きつと左手で握ったんだよ！！、だってこれは訓練の時に怪我したんだもん！！」 「はあ、そうですか」

まあ、どうでもいいか

少年はなのはの怪我についての質問を止め、ここに来た理由でもある大事な話についてきく

「それでなのはさん、そろそろ大事な話について教えてくれませんか？」

「・・・そうだね、そろそろ話そうか」

「大事な話ってそもそもどういう話何ですか？」

「君の人間関係について少しね」

人間関係？何か問題でもあったか・・・？

「最近、ティアナと仲が好いよね」

「え？、そうでしょうか前と変わらないと思いますけど」

「前からティアナとキスしてたの？」

ッ！？・・・何でなのはさんがそれを・・・？

「3日前にね、見ちゃったんだ、ティアナの部屋の前で2人がキス

してたの」

少年が何も言わなくてもなのは続ける

「始めはね、嘘だと思ったんだよ？、でも、次の日も見ちゃったんだ、流石に2日も続けて見ちゃったら信じるしかないでしょう？」

まるで少年の行動が全てわかってると言いたいように少年の言いたいこと全てわかってると言いたいように

「そして昨日の休憩時間中にティアナに聞いたら2人が付き合ってるって言われちゃってね・・・

あれはティアナの勘違いなのかな？、それとも君が無理やりティアナの彼氏にされちゃったのかな？」

「いや、そんなこと無いですよ・・・」

「何でティアナを庇うの？」

そっか！！、正直に言っちゃったらティアナに何されるか分からないもんね。

でも大丈夫だよ、私が君を守から」

「いや、そうじゃなくて・・・その、告白したのは俺から何です」

少年がそう言うとなのはは首を傾げる

「言ってる意味がわからないよ？だって君はティアナに脅されてるんでしょ？」

そっじゃ無きゃこんな事あるはず無いよ」

「脅されて何ていません！！俺は、ティアナの事が好きだから告白したんです」

少年が顔を赤くしながらそう言うとなのははクスクスと笑いだす

「・・・？どうしたんですか」

「ねえ、何で君はティアナが好きなの？」

「それは・・・何時も気が利くし、何があっても前向きだし、優しい・・・」

「そう・・・本当に君が告白したんだ」

なのははクスクスと笑うのを止めると少年の目を真っ直ぐ見る
なのはの目には光が無い

「私は君が望めば何だってするよ、管理局を辞めろって言われれば辞めるし君が自分のために一生働けって言えば一生働いてみせる」

「・・・何が言いたいんですか？」

「ティアナと別れて私と付き合って」

「ッ！？・・・そんなの嫌ですよ！！！」

「何で？君から別れようって言いたくないならティアナに言わせるのもいいよ？」

「いや、そういう話じゃ無くて！！、そもそも別れたく無いんですよ俺は！！！」

「そんなこと無いよ、私はわかってるもん君の本当の気持ちも、君以上に知ってる」

「何でそんなこと言えるんですか？」

「私は君のことずっと見てるんだよ？だからわかるの君はティアナとは別れて私と付き合いいたいってことも」

・・・無茶苦茶だ

さっきから意味がわからない、もういいや帰ろう

明日また何かあればはやてさんやフェイトさんに相談すればいい

「言いたいことはわかりましたでは、俺はこれで」

「君は私が出した紅茶を美味しいって言うてくれたよね」

？何だ急に

少年はなのはから差し出された紅茶を飲み確かに美味しいと応えていた

「はい、言いましたけど・・・それが何か？」

「私、本当はねキッチンで指を怪我しちゃったの」

「紅茶を入れるのに指を怪我したんですか？」

「うん・・・でも、少し違うかな『しちゃった』んじゃないくて『するようになった』かな」

しちゃったは間違えてやったって感じだがするようにしたって聞くと故意を的を感じだが・・・

「何時もは包帯何てキッチンには置いてないんだけど今日は怪我することがわかってたから用意しといたの」

「わざと怪我したって言いたいんですか？何でまたそんなことを？」

「君に美味しい紅茶を飲んで貰う為だよ」

美味しい紅茶を飲んで貰う為に怪我をする？

・・・もしかして

「紅茶の中に・・・まさか・・・」「うん、入れたんだよ、『私の血を』」

ツ！？意味がわからない！！何で自分の血を入れて・・・！！
少年はその話を聞くとそのまま飲んだ紅茶を全部吐き出そうとトイレへと急ぐ

部屋が広くなつてはいるが基本的な構造は少年と同じということもありトイレは直ぐに見つかりそのままさっき飲んだものを吐き出そうとする

「嬉しかったんだよ、君に美味しいって言ってもらって、紅茶と一緒に私の血の味も褒めてもらってるって考えただけで幸せだったよ」
トイレにいる少年に聞こえるように扉に向かって幸せそうに笑いながら言うのは、それを聞いてまた吐き気が少年を襲うがそれに耐える。

ふざけるな！！！！

紅茶と一緒に自分の血を混ぜるだなんて・・・！！！！
いや、この問題は後だ

今は1分1秒でも早くこの部屋から出たい

少年はさっきから何かいつてるのはを無視しながら自分の今連絡できる人たちを探す

ティアナやスバルは寝てるだろうし仮に起きてたとしても力にならないな

エリオとキャラ口は間違いなく寝てるだろう

・・・なのはさんの事だしここはフェイトさんかはやてさんに助けてもらうか・・・

少年の考えがまとまったと同時に目の前にモニターが出る

そのモニターには右手が映っており、人差し指には包帯が巻かれていた

「ちゃんと私の手見えるかな？」

靡ごしになのはさんの声が聞こえる

やはり、この手はなのはさんのなんだろう

「・・・何なんですか？」

「君がティアナと別れないんなら私このまま手首を切るよ？」

はあ！！！！？何言ってるんだよこの人！！！！？

「な、何でそんなこと！！？」

「だって君が私と一緒に居てくれないならもう私には生きてる意味が無いもん」「そんなこと無いですよ！！それになのはさんが死んだら六課の皆だって悲しみますよ！！」

少年が説得するなか、なのはは人差し指の包帯を取っていく

「ねえ、見てよこの傷」

包帯が完全に取れた人差し指にはかなり深い傷があった

「本当はもつと小さめの傷にする予定だったんだけど・・・君とティアナのこと考えたらこんなに深くなっちゃった」

「ッ！！？・・・な、何でそんなこと・・・」

「ちゃんと言ったよ？君が好きだから」

「こんなこと好きな人にやる行動じゃない！！！」

「そうかも知れないね・・・でも、こうでもしないと君は私を見てくれないでしょ？」「そんなこと・・・」

「訓練が終わったあとティアナの誘いには乗ったけど私の誘いには断ってたじゃん」

「そ、それは……」

「ほら、やっぱり君が私を見てくれるにはこうするしか無いじゃん」

そっぴうとなのはは左手に魔力刃を作る

「どうする？君の答え次第では私は……」

ツー！！？……本当に死ぬ気なのか！！？

……俺はティアナの事が好きだ……でも、それでも……

「止めてください！！！！ティアナとは別れますから！！」

「本当？」

「はい、本当です！！ですから自殺何て馬鹿なこと止めてください」

「わかったよ、君が言うなら」

なのはは魔力刃を消して少年の前に出していたモニターも消す

少年はトイレから出るとニコニコと嬉しそうな笑顔をしているのはを見る

、今さっき自殺しようとしていた人間には全く見えない

「じゃあ、ティアナとはどうやって別れる？」

「……俺が別れようって言います」

「そっか、わかったよ。」

そろそろ遅いしもうそろそろ帰って寝たほうがいいよ？明日も早いんだし」

「……そうですね、わかりました」

少年はその会話を最後になのはの部屋を出る

「待つて!!」

部屋を出ると直ぐになのはさんに呼び止められた

「……………どうしたんですか?」「これが最後だと思うけど……
・一応ね」

なのはさんは俺に顔を近付けてくる

……………さっきの事もあり、恐怖心からか彼女の目をまともに見れない

「もし私以外の人と君が付き合ったら……………またこういう事になるかも」

「ッ!!!?……………覚えときます……………」
「うん、そうしといて」

それだけ言うとそのまま離れていき「おやすみ」とだけ言ってなのはさんは部屋へと戻っていった。

次の日、俺はティアナに別れ話を出した。

何を言われるかわからなかったが、意外にも何も言われることは無かった。

もしかしたらなのはさんが既に何か言ってたのかもしれない。

最近なのはさんに誘われたらその誘いに乗ることになっている。

本当は断りたいがこの間の事もあり断るだけの勇気が無いのだ。
だが、この間のような事は無く、なのはさんと2人、フェイトさん
がいれば3人で雑談している。

なのはさんとは付き合っではない。

お互いに告白もしてないし俺は告白なんかしたくない
だが、彼女から告白されたら俺はおとなしくそれを了承するのだろ
う。

俺には選択肢なんて無いんだから・・・

今日も訓練が終わり彼女が近付いてくる。

彼女の言うことはわかってるし、それにたいする俺の返答もわかっ
ている。

彼女がいるかぎり俺には選択肢なんて無いんだから・・・

（後書き）

こんにちはー戮bでーす

今回は私が初めて書く小説と言つのもあり、駄文としか言いようがない作品ですね

……後書きを書いてる私は既に四弾迄かいてるんですが

誤字脱字が多い

選ばれなかった選択肢を書くときに読み直してみたんですが書いたんですが、多すぎる

……やれやれだな、過去の俺

修正しようと思ったのですが、私が初めて書いた短編と言つこともあり、修正せずに残しとこかなーとか考えてます

修正するなら新規投稿かな

では、今回はこの辺りにしましょう

感想何時でも待ってます!!

お気に入り登録してくれたら嬉しいです!!

また、あなたと縁があれば、嬉しいです

PS病みつきキャラのリクエスト、何時でも募集中です!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8011t/>

病みつきなのは

2011年10月30日11時05分発行